

## *New England PRIMER* 研究 補遺

ニュー・イングランド社会変化と  
non-New-England-PRIMERS

鈴木 進

17世紀ニュー・イングランド社会を描いた小説、例えばナサニエル・ホーソーン<sup>1)</sup>の作品の中には *New England PRIMER* の名を直接あげるか、あるいはその内容について言及したものがいくつかみられる。*THE HOUSE OF THE SEVEN GABLES* の第2章では、生活の手段を考えるヘプジバーが子供たちを集め、読み書きを教えることによって糊口をしのごうとする個所がある。彼女は「小さな子供たちのために学校を始めてみようと考えることがよくあった。一度などは女教師になるつもりで、昔習った『ニュー・イングランド・プリマー』を勉強しなおしたこともあった」。また1640年代のボストンを描いた *THE SCARLET LETTER* の第8章でウイルソン牧師がパールに向かい「ねえ、お前の造り主はどなたか答えられるかね」。この間に対しパールが「3歳までの間に身につけた教えはそうとうなものだったから、『ニュー・イングランド・プリマー』や『ウエストミンスター教理問答』の最初の部分ならその気になれば普通の試問には応じることができたであろうに。もっともその有名ないずれの書物もどのような体裁のものか実物は見たことはなかったが」。

このように *New England PRIMER* は17世紀末のマサチューセッツ湾植民地を中心としたニュー・イングランド地方植民地の子供たちに読み書き、特に聖書が読めるようにする識字教育とあわせて宗教教育を叩き込むために用いられたほとんど唯一の初等教科書であった。その数は17世紀末から19世紀の初めまでの間に約300万部以上発行されたといわれ、アメリカ・ピューリタンの育成に寄与し、初期アメリカ教育史に大きな影響を与えた。<sup>2)</sup> *New England*

*PRIMER* が学校教科書として用いられたほぼ150年にわたる長い期間には幾度も改訂がなされたが、そのいずれの版も内容において終始峻厳なピューリタニズムの枠から一步たりとも外れることはなかった。勿論その間に植民地が英本国より独立するという大きな事件を経るなかで、対英国および英国王との政治的、宗教的関わりのある文章、語句の部分的書き換えが行なわれたのは当然である。

*New England PRIMER* をアメリカの学校教科書の歴史という視点からみるならば、その初期の版が出てから約70年間は *New England PRIMER* というタイトルが初等教科書の市場を独占していた。ところが *New England PRIMER* に対抗する形で18世紀半ばにロンドンで出版された *ROYAL PRIMER* がアメリカ植民地での販売に成功したのをきっかけに、これ以外にもさまざまな名を付した *PRIMER* が出るようになった。Charles F. Heartman の編んだ *AMERICAN PRIMERS INDIAN PRIMERS ROYAL PRIMERS* And thirty-seven other types of non-New-England Primers. Issued prior to 1830 (Printed for HARRY B. WEISS, Highland Park, N.J. MCMXXXV) には40種類、186冊の *Primer* について解題がなされている。

時期的に18世紀半ば、*New England PRIMER* と併行して、その後は *New England PRIMER* に取って代わる勢いでこのように多くの *Primer* が出るようになったのはなぜか。この疑問について考える手掛りとして Heartman の文献解題を検討・分析してみると、多くの *Primer* が現われた背景に18世紀ニュー・イングランド社会の変化との関係が読みとれるように思われる。ある国のある時代における国民の知的、精神的文化を形成するうえで学校教科書、特に初等教科書の及ぼす影響の大きさはわれわれの身近に知るところである。この小論においてはアメリカ人の精神と思想形成に大きく作用し、現在もなお、反駁も含めてアメリカ文化の根底に流れ続けるピューリタニズムの問題について、初等教科書の変遷をとおして考えてみたい。ニュー・イングランド・ピューリタンたちが目指すバイブル・コモンウェルス建設の中で次の世代の子弟に期待する人間像の反映としての *New England PRIMER* が18世紀半ばの社会変化を受けて、いわば脱 *New England PRIMER* としての多くの種類の

Primer が現わる傾向にもアメリカ・ピューリタニズムの変容と特殊性がみられると考えられる。

Heartman がその序の中で述べているように Primer という名の書物はアメリカにおいて1830年以前に限っても数限りなくあり、われわれが問題にする Primer をどの範囲までとするか、限定するのは難しい。さらにそれらの Primer の原典に直接接することは現地の研究者にとってでさえも困難であるから、筆者の用い得る中心的資料が Heartman の *AMERICAN PRIMERS* *INDIAN PRIMERS* *ROYAL PRIMERS* の扱っている Primer だけに限定されること、そして Heartman の書物は bibliographical checklist であり、それら各種 Primer についての詳細な目次と解説にしかすぎないということを初めに断わっておかなくてはならない。しかし200種類近い多くのコレクションに基づくこの書物によって、あまり外れることなく *New England PRIMER* 周辺の初等教科書について大きな傾向を把握するのは不可能でないと思われる。

Heartman の収集した Primer を分析してみると、そこに自ずと次のようなグループができることがわかる。その第1は *New England* 以外の地名がタイトルとして Primer の前に付せられているもの。第2は独立したアメリカを強く打ち出したいくつかの名称。第3は Primer が本来教派の教義を教える書物であったことから、宗教色の濃い内容であったものを、これらさまざまな Primer の中には会衆派教会のカルヴィニズム以外の宗派のカテキズムを含む内容のものがみられること。第4は宗教色よりも道德倫理に重きが置かれている内容のもの。そして最後に、次の時代の一般的なスクール・ブックへの萌芽がみられるものの5種類になろう。

筆者は以上のような *New England PRIMER* のヴァリエーションとして各種の Primer が生み出された要因として、18世紀半ばから著しくなるニュー・イングランド社会をとりまく変化の諸要素との関連をアメリカ・ピューリタニズムの視点からとらえ、これをアメリカ文学の背景を知る基礎研究としたい。

*ROYAL PRIMER* をはじめ *AMERICAN PRIMER* など *New England PRIMER* 以外の Primer を Heartman は non-New-England PRIMER と呼

んでいる。それら各種の Primer を *New England PRIMER* のヴァリエーションとしてとらえるならば、変化の過程を知るためにも先ず初めに元になった Primer という書物、特に *New England PRIMER* とはどのような書物で、その教科書を求め支えた社会がどのようなようであったか、またそれらの求めに *New England PRIMER* の内容はどうかを概観する必要がある。そのうえで18世紀ニュー・イングランド社会の特徴を眺め、それらが教科書を編むうえでどのように反映されたかを考察してみよう。

そもそも Primer の起源は印刷術の発明とほぼ同じ時代まで遡ることができるといわれる。中世の教会が宗教教育の手段として Primer の有効なことを発見し、彼らが一日の生活の中で決められた時間に捧げる祈りのことば、十戒、主の祈り、讃美歌などをおさめた書物を作り、それを Primer と名付けた。一方において印刷技術が進歩し、人々が容易に書物を手にすることができるようになると書物を読みたいとの多くの願いが起こってくる、そのためには先ずアルファベットを知る必要が生じ、先の宗教教育の書物にそれが加えられるようになり、それらの初等教科書を総称して Primer と呼ばれるようになったとい<sup>3)</sup>う。

英国においても多くの Primer が出版されるようになり、人々への影響力、特に為政者の所属する教派と異なる教義の流布を恐れた王は、ジェームズ二世の時代に王の許可なしに行なわれた Primer の出版を厳しく取締り、違反する者<sup>4)</sup>を処刑したという。

アメリカ植民地への移住者たちの中には当然英国の Primer を持込んだ者がいるだろうと想像される。しかしそれがどのような経過をたどり、誰の手によって *New England PRIMER* として編集され、出版されるようになったかは不明である。研究者の間では初期の出版者として Benjamin Harris の名をあげることはあるが、彼が *New England PRIMER* の著者であるとする説<sup>5)</sup>はない。

*New England PRIMER* が用いられた150年という期間に出版された版には多くのものがあるが共通する内容の構成として、おおよそその前半は4、5歳の子供に文字の読み方を教える目的にあてられ、アルファベットの文字に聖

書の人物を描いた木版画を添え、その文字を含む2行から4行にわたるカルヴィニズムの教えを各行韻をふむ対句にして覚えさせる形式をとっているのが特徴である。後半はカルヴィニズムの教義そのものを教理問答形式にして暗唱させる部分を中心とする、この二つに分かれている。そのいずれにおいても初期ピューリタンの目指すバイブル・コモンウェルスの構成員を育成する内容がすみずみまで色濃く反映されている。

初期ニュー・イングランド・ピューリタンたちは自分たちの築こうとした社会や人間生活の本質に関わることがらすべてが聖書のことばによって示されると信じていた。社会の規範も聖書の中に指針を求め、人々は旧約聖書の律法を文字通り厳格に守るように求められた。また個人の生活における「救い」の鍵も各人が自ら聖書を読むことによるのみ見い出されると考えた。このようにすべて聖書を中心とするピューリタンたちにとっては自らの責任において次の世代を担う子弟たちに聖書の読解能力を持たせることが自分たちの社会を存続させるのに不可欠であった。1640年代にマサチューセッツ湾植民地が<sup>6)</sup>発布した二つの教育法令はそのことを明確に物語っている。

またこの考え方は *New England PRIMER* の冒頭が次の言葉で始まっていることからもうかがい知ることができる。先ず扉の次に Good Boys at Their Books. HE who ne're learns his A, B, C, Forever will a Blockhead be ; But he who to his Book's inclin'd, Will soon a golden Treasure find. (1785—1795年の間に出版されたと推定される版)。

文字の読み方を教える具体的な項目としては初めにアルファベット小文字とともに Vowels, Consonants が並べられ、次に Double Letters, Italick Letters のアルファベット大文字、小文字が載っている。次のページからは The Great Capital Letters, The Small Letters, Easy Syllables for Children. Words of one syllable, Words of two syllables, Words of three syllables, Words of four syllables, Words of five syllables と続く。その次が有名な In Adam's Fall/we Sinned all で始まる jingle に5ページほど当てられる。アルファベットの文字を教えるのが主たる目的の書物前半においても、このように “A” というひとつの文字にピューリタンの人間観を示すアダムの墮落による

「原罪」の意味をこめているのである。

*New England PRIMER* 後半の教義を教える部分ではピューリタンのカルヴィニステック信仰がより一層明らかになる。それは次の言葉で始まる。

Now the children being entered in his Letters and Spelling, let him learn These and such like Sentences by Heart, whereby he will be both instructed in his Duty, and encouraged in his Learning.

「原罪」と「回心」は次の例にもみられる。木版画の火炙の絵で広く知られる John Rogers が死を前にして彼の子供たちに書き残したことばの中に

“I know I am a Sinner born, from the original, And that I do deserve to die, by my Fore-Fathers fall. But by our Saviour’s precious Blood, which on the Cross was spilt, Who freely offer’d up his Life, to save our souls from Guilt, I hope Redemption I shall have and all that in him trust ; When I shall see him face to face, and live among the Just. Why then I should I fear Death a grim look, since Christ for me to die?”

そして更に *Spiritual Milk For AMERICAN BABES*, By JOHN COTTON の中の問答でも

Q Are you born Holy and Rightous?

A No, My first Parents sinned, and I’m in them.

Q Are you then born a Sinner?

A I Conceived in Sin & born in Iniquity.

Q What is your Birth Sin?

A Adam’s Sin imputed to me, and Corrupt Nature dwelling in me.

のように彼らにとって人間とは本来アダムの原罪を負って生まれ、罪許されずに地獄に落ちる存在なのである。子供についても同様、彼らは罪に対する自覚が大人より少なく、回心する機会も少ないだけに一層邪悪であるというのである。<sup>7)</sup>これがピューリタンの児童観であり、彼らの教育の根底にある考え方であった。そしてカルヴィニズム教義のエッセンスを集約的にまとめた「ウエストミンスター教理問答」の *SHORTER CATECHISM* のページではふたたび

「原罪」が強調され

Q Did all Mankind fall in Adam's first transgression?

A The Covenant being made with Adam, not only for himself but for his Posterity, all Mankind descending from him by ordinary Generation, sinned in him, & fell with him in his first transgression.

Q Wherein consists the sinfulness of that estate whereinto Man fell?

A The sinfulness of that estate whereinto Man fell, consists into the Guilt of Adam's first Sin, the want of Original Righteousness, and the Corruption of the whole Nature, which is commonly called Original Sin, together withall actual Transgression which proceed from it.

こうして自分が罪人であると自覚し、悔い改め回心した者だけがイエス・キリストの贖いによって救いに入れられると教えられる。それと同時にカルヴィニズムの5つの柱のあとの2つ、election「選び」とpredestination「予定」が教えられる。

Q Did God leave all Mankind to perish in the estate of Sin & Misery?

A God having out of his meer good pleasure from all Eternity, Elected some to everlasting Life, did enter into a Covenant of Grace, to deliver them out of the state of Sin & Misery, and to being them into a state of Salvation by Redeemer.

彼らの信ずる正統的な神はまた「父・子・聖霊」の三位一体の信仰である。<sup>8)</sup>

これに関する問答は

Q Are there more Gods than One?

A There is but ONE only, the living and true God.

Q How many Persons are there in the God-head?

A There are Three Persons in the God-Head, the Father, the Son, and the Holy Ghost.

他の宗派の教理が入り込むのを恐れたピューリタンたちは、教会の統一を守るために、また彼らと異なる教えに毒されることのないようにとこれらの教義

の問答を学び守ることを“The Dutiful child’s promise”とした。

この他 *New England PRIMER* の後半のカルヴィニズムの教義を教える部分の項目をあげると The creed, The Ten Commandments, Duty of children towards their parents, The names and Order of the Books of the Old and New Testament, The numeral Letters and Figures, which serve for the ready finding of any chapter Psalms, and verse in the Bible, Mr. John Rogers の火刑の図とそれに続く Some few Days before his Death he writ the following Exhortation to his children. そして巻末に THE SHORTER CATECHISM を載せて教えのしめくくりとした。

*New England PRIMER* の中で繰り返し強調される「原罪」と「選び」と「予定」を教えるカルヴィニズムの教義はマサチューセッツ湾においては「契約神学」というこの植民地特有の思想に基づき聖書国家の建設が進められた。<sup>9)</sup> この契約は「神と人との契約」と「信徒相互の契約」という二重の構造をとっていた。しかしはやくも17世紀半ばにして諸々の内部矛盾を露呈することになる。このことは植民地社会の発展と変化、さらに世代の交代が進むにつれて一層顕著になっていく。それらのうちで一番問題となる点は彼らの会衆主義に基づく教会制度のあり方であった。会衆制教会において教会員となるためには、会員の前で自分の罪を告白し、神の救いにあずかった回心体験を表明し承認されなければならない。このように全人格的に了解された者相互の契約によって教会は設立されるものであった。しかし「救い」は本来神の側の行為であり、人間の理解や認識を越えた次元のものであり客観的証明が困難な筈である。そこでマサチューセッツ植民地では「業の契約」という考え方がとられた。救われた者、つまり「恩恵の契約」(カヴェナント・オヴ・グレース) に入れられた者は「業の契約」(カヴェナント・オヴ・ワーク) を果たす能力が与えられている、したがって業の契約に努める者は救いにあずかっている証拠であるという論理を展開した。しかしこの方法は後の信仰の弱体化する世代においては「業の契約」に一層重きが置かれるようになり、信仰というよりも道德生活に傾いてゆく根を宿していた。

第2の問題点として会衆制教会に基づく神権国家においては教会員にのみ公



民としての選挙権が与えられていた。そのため少数の教会員が圧倒的多数の、いわば救われぬ、あるいは信仰に無関心な一般大衆を導くことによって植民地の運営がなされるという体制をとっていった。これもまた後に神権政治を崩壊へと導く諸条件のひとつであった。<sup>10)</sup>

教会員の子弟であっても回心体験の稀薄な二世、三世に対応して教会員資格を半途契約（ハーフ・ウェイ・コヴェナント）という妥協の方法がとられたが、従来の非教会員に加え土地と機会を得るのが目的で入植してくる外国からの移民が増え、次第にこの勢力が神権政の管制を逸脱するようになった。このような移民が社会的移動を引きおこし奥地に住むようになり「タウン」を遠隔化させた結果、地域と結びつく性質をもつ会衆制教会の運営を困難にさせた。またこの会衆制度の経済的基盤は静的な自給自足の農業社会に適合していたのであるが、商工業の発達がさらなる労働力の需要を求めて人の動きを激化させ、それまでのピューリタニズムに基づく厳しい従弟制度をも軟化させていった。

植民地経営が成功し、繁栄するにしたがって植民地本来の目的が薄らいでしまうのは皮肉な事実である。新しい世代が「恩恵の契約」のしるしを得たいと願い、豊かな土地で「業の契約」に全力を尽くすことにより彼らに繁栄がもたらされる。しかしその効果は信仰が一層深まることにはつながらず、かえって逆に作用したのであった。経済的に裕福になった商工業階層はやがて世俗化し、信仰から離れ、会衆派を離れ、その経済力を背景に社会的勢力を増していくのである。中でも貿易等に携わる者は外国と接触することにより合理的、自由主義思想をとり入れていくことになる。彼らが海外と接触する表玄関となったボストンなどの港湾都市には新しい風俗が紹介され、享樂の施設も設けられるようになった。

17世紀末より18世紀にかけて主としてこれらの港を通して多くの移民が入植するようになると、ピューリタンにとって異端であったバプテストやクエーカーやメソジストなどの侵入を食い止めることはもはや困難になってきた。これにより植民地の宗派の構成が多様になったのに加えて、有力な商工業者たちの主張した合理主義、アルミニズム、後には理神論等がピューリタン正統派を

攻撃することになる。

人間の自由意志“freedom of the will”を根本教義とするアルミニアニズム<sup>11)</sup>は先ずピューリタニズムの「原罪」や「恵みの契約」に疑問を投げかけた。彼らにとって罪とは神に背く人間の性質なのであって、すべての人が現実に罪を犯すわけではない。罪を犯すかどうかは人間の自由意志によって決まる。従ってアダムの罪を後の全人類がそのまま責任をとることは出来ないと主張する。またピューリタンの強調する神の「選び」は一方向的に定まっているのではなく、人間の行いに関係があるのであって、正しい生活と善行により人は救われる。また、イエスの死は選民のためだけでなく万民の贖罪のためにあるというのである。

「内なる光」(Inner Light)をその教えの中心におくクエーカーも同じように「原罪」を退け神聖な個人の「内なる光」により直接神と交わることができる、従って教会制度や礼典を無用のものとしたのである。

これら社会的、思想的変化はニュー・イングランド植民地の住民が信仰と教育に特別力を注ぎ、敬虔なキリスト教徒にして植民地建設のよき市民を育成しようとするピューリタンの教育のあり方に影響を与えるようになった。<sup>12)</sup>そして新しい教育観に基づく方法は、教科書のあり方にも当然あらわれることになる。このような時代の動きをとらえて、それまでの *New England PRIMER* の伝統を離れて別の新しい初等教科書を作ろうという冒険を恐れていたアメリカの出版業者たちに代わって、ロンドンの出版者ジョン・ニューベリー (John Newbery) がそれを行なった。1750年頃ロンドンで出版された *ROYAL PRIMER* がそれである。

もちろんそれ以前にも英国で出版されたいく種類かの Primer が移住者たちによって植民地に持込まれたことは十分想像がつくが、それらは質、量とも *ROYAL PRIMER* に比較するに足らない。ところがこの *ROYAL PRIMER* がフィラデルフィアに、それから少し遅れてボストンに入ると一般の需要が高まり、植民地の出版業者たちの注目を集めるところとなった。彼らは先に述べたような諸々の社会変化の中で人々が新しい形の教科書、つまり厳しい宗教よりも道徳や隣人愛を教える内容のもの、さらに宗教や教訓よりも文字そのもの

を教えることに力点をおいた方針の書物を求めるようになっていたことを知った。そして他の出版業者たちも様々な書名の Primer を考え、内容もより世俗的なものとしたので、18世紀末には、いわば *New England PRIMER* の変種 (Heartman はそれらを non-New-England PRIMERS と呼ぶ) が次々と出版された。当時のアメリカ植民地には著作権の制度がなかったため、出版業者が同種類の初等教科書の良いと思われる部分を勝手に使用したことも出版を容易にさせた要因と思われる。

Heartman の *Non-New-England PRIMER* には40種類、186冊の Primer について解題がなされている。地名を含んだタイトルは58種類あり、出版の場所はロンドン、モンリオールを除いてアメリカ58都市、その多くがニュー・イングランド地方、ニューヨーク、ニュージャージ、ペンシルベニア等の北東部の地域に集中しているがボルティモア、チャールストン、さらにサバナ (ジョージア) の名までもみられ、Primer に類する初等教科書の需要の全国的な広がりが見られる。

*MAINE PRIMER* (1828), *MASSACHUSETTS PRIMER* (1789-1790), *NEW YORK PRIMER* (1747), *PENNSYLVANIA PRIMER* (1828), *HARRISON'S NEW-JERSEY, ANALOGICAL PRIMER* (1826), *PITTSBURG PRIMER* など北東部の州や都市名がついた Primer の中のひとつ *ALBANY PRIMER* (1823) の場合はタイトルだけが変えられ、中味については目次で見ると限り *New England PRIMER* とほとんど同じ内容と思われる。「オルバニー」の名は愛郷心のあらわれであろうという。同様に内容にあまり新しさが無いがプロビデンスで出版された *AMERICAN PRIMER* は1776年に初版が出ていることから英本国からの独立意識が感じられ、さらに *UNITED STATE PRIMER* (1818) の命名には、アメリカ合衆国の存在を主張しようとする出版者の意気込みを推し量ることができる。それに類するタイトルには *COLUMBIAN PRIMER* (1790) があるが、Heartman によれば内容的には *New England PRIMER* とほとんど違いがないという。タイトルとしては「アメリカ合衆国」を付していないが New York で出版された *NEW PRIMER* (1769-1773) と *ORAM'S AMERICAN PRIMER* には合衆

国の象徴としてのわしの図と合わせ“E Pluribus Unum”が刻まれているのは興味深い。また *ORAMA'S AMERICAN PRIMER* の出たのが1812年という、第2次対英戦争と同年になっているのは出版者の心意気であろうか。

*New England PRIMER* がピューリタンのカルヴィニズムの教義を教える極めて宗教色の濃い内容の教科書であることは繰り返し述べてきた。ところが前述の *AMERICAN PRIMER* (1799, Newfield) に Catechism of Episcopal Church を載せていた版があるのは明らかに聖公会関係の出版者の手によるものであろう。1777年、ロンドンで出た *PRIMER* ではただ“catechism”, としか記されていないが“set forth agreeable to the Book of Common Prayer, Authorized by the King”となっているのはアングリカン教会によるものであろう。ただし興味深いのは出版の年がアメリカの独立を宣言した次の年に出ている点と合わせ“to be used throughout his Dominions”とあるのは出版の意図に政治的背景が推測される。これと対照をなすのは *COLUMBIAN PRIMER* で、その1802年の版はアメリカ合衆国が実質的に機能し始めていると思わせる“Published according to act of Congress”の文字が見られ、宗教的には“non-denominational character”とあることからひとつの宗派を越え、合衆国のいかなる地における使用にも耐えられるスクール・ブックとしての性格を持つ教科書がやっと出現したのではないであろうか。

コトン・マザーの *Bonifacius* 『善行論』の出版は1710年であるが、すでに18世紀の初めにこの書物が広く読まれたということはピューリタニズムの重点が道徳や隣人愛に移りつつある動きのように思われる。そのような傾向はこの時代の *New England PRIMER* の編集、内容にもあらわれ18世紀末の版には教義よりも道徳倫理に関する内容を盛り込む傾向に変わってきている。種々の non-New-England *PRIMER* の場合はその傾向がより著しくなっている。例えば *FRANKLIN PRIMER* (1802) には A New Useful Selection of Moral Lesson という項目が見られ、道徳家としてのフランクリンに人生の範をとるようになった傾向、同じ *PRIMER* の1806年版に“paragraph describing Franklin reading a man whose manner of life from youth's first dawning morn to man's meridian day, is worthy the imitation of all who

would wish to thrive upon this world vast theatre” とあることからこの時代が求めた理想的人間像は神の前に卑小な罪人ではなくて、アメリカン・ドリームの実現者ベンジャミン・フランクリンに取って代わられたということであろうか。

最後のグループはスクール・ブック的性格の強いもので、明らかに児童観の変化がみられる。MASSACHUSETTS PRIMER では An Easy and Pleasant Guide to the Art of reading とあり、NEW YORK PRIMER には Delightful task to rear the tender thought の項目が載っている。UNITED STATES PRIMER (1803) は Pretty stories which please the children amazingly とあるのは、子供を viper とみなす<sup>13)</sup>「原罪」的児童観、子供特有の心理条件を無視したピューリタンの教育観とは何と大きな隔たりがあることであろうか。ピューリタンが聖書の言葉の意味の解釈に個人の感情や想像を含めるのは真剣ではなく、不真面目な態度である、としていたのに対し CHILD'S PRIMER (1800) には “A was Apple Pye” “A was an Archer” のナースリーライムがとり入れられていることについて、Mr. Luther M. Livingston が “Probably the first to contain these rhymes, and a very early specimen of a radical departure from the thralldom of the famous dreary New England Primer” と述べているというのは至言といえるであろう。AMERICAN PRIMER の最後に 2, 3 の寓話とおとぎ話が載っているのは、われわれの学校教科書に一步近づいたことを物語っている。さらに PICKET'S JUVENIEL OR UNIVERSAL PRIMER (1830) の “the Juvenile Spelling-Book, Essentials of English Grammar” とあれば、もう近代的な意味での学校教科書としても立派に通用するであろう。

New England PRIMER の伝統がそのヴァリエーションとしての多くの non-New-England-PRIMER に引き継がれたもののいくつかには、通俗的な Dr. Watts の Cradle hymn, Shorter Catechism by Cotton Mather, guide the youngerster to the teaching of Scripture などが載せられているものがあるが、non-New-England PRIMERS においては何よりもアルファベットを中心とした文字の読み方へと発展させ、多くのページを割いていることから、ひと

り宗教に囚われない一般の書物の読解に目的の拡大がなされていったことがわかる。それでは *New England PRIMER* と non-New-England PRIMERS のちがいは何か、ひとことで言うならば後者が宗教的伝統から離れ、内容的により世俗的になって、文字を教え、聖書をも含めた書物一般の読み方を教えることにより重点がおかれ、次の時代の本格的学校教科書への橋渡し役を果たしたことといえるであろう。

## 注

- 1) ホーソンの短編小説の中で次のような個所に見られる。

“It was actually fancied, at that period, that New-England might have a John Rogers of her own, to take the place of that worthy in that Primer.” “The Gray Champion”

“As he spoke he pointed his staff at a female figure on the path, in whom Goodman Brown recognized a very pious and exemplary dame, who had taught him his catechism in youth, and was still his moral and spiritual adviser, jointly with the minister and Dacon Gooking.” “Young Goodman Brown”

また、17世紀ではないがソーロウの『ウオルデン』の中の “glorify God and enjoy him forever” は *New England Primer* の “Shorter Catechism” への言及である、との指摘が西川、大橋編 *AMERICAN POETRY AND PROSE* の NOTES にある。(東京、研究社、1990年)

- 2) 拙論「The New England PRIMER とアメリカ・ピューリタンの育成」『北陸学院短期大学紀要第15号』を参照されたい。その中で不十分だった点をその後入手した資料等で補って今回再び取り上げた。
- 3) Charles F. Heartman, *NON-NEW-ENGLAND PRIMERS*, INTRODUCTION, X I
- 4) Ibid., X I
- 5) Paul Leicester Ford, *THE NEW ENGLAND PRIMER*, Introduction pp. 12—18 (New York, Dodd, Mead Company, Mcccc xcix)
- 6) Louis B. Wright, *THE CULTURAL LIFE OF THE AMERICAN COLONIES*, p. 102 (New York, Harper & Row, Publishers, Incorporated, 1962)
- 7) 梅根 悟『世界教育史大系』17, p. 277
- 8) 18世紀半ばに三位一体説を否定する Deism の波がアメリカ植民地を襲った。また1815年までにボストンの16の改革派組合教会がユニテリアニズムを採用した。
- 9) 契約神学について『ピューリタニズムとアメリカ』の中の大下尚一「ピューリタニズム形成と伝統」および阿部斉「ピューリタニズムとデモクラシー」の論文に多くの教えを受けた。(東京、南雲堂、1971)

- 10) 後に教会員資格について、1691年の第二特許状では選挙に必要な資格を一定財産とした。  
James Truslow Adams, *THE FOUNDING OF NEW ENGLAND*, pp. 446—447 (Boston, The Atlantic Monthly Press, 1922)
- 11) Vernon L. Parrington, *MAIN CURRENT IN AMERICAN THOUGHT, VOLUME ONE* p. 152 (New York, Harcourt, Brace and Company, 1954)
- 12) 本稿執筆にあたり神権政をとりまく社会状況の変化と教育について筆者は前掲(7)の『世界教育史大系』17. の中の特殊研究「教育におけるピューリタニズムと「左翼」プロテスタンティズム」, に多く負っていることを記し, 感謝を申し上げたい。
- 13) Jonathan Edwards は子供をそのようによんだ。

(Heartman の *NON-NEW ENGLAND PRIMER* に7種類の *INDIAN PRIMER* が取り上げられている。その中で一番早い版は1654年, そしてHeartmanによれば1830年以降にも大量に出ているという。1669年の版の扉を参考までに次に紹介しておく。J. E. とはインデアン宣教で有名な John Eliot (1604—1690) のことであろう。この他に彼は Natick Indian のことばで1661年に「新約聖書」, 1663年には新旧約全部をケンブリッジで出版している。

The Indian Primer ; Or, The way of training up of our Indian Youth in the good Knowledge of God, in the Knowledge of the Scriptures and in an ability to Reade. Composed by J. E. 2 Tim 3. 14. 15. Qut ken nagwutteash nish nah-touanish kah pohkoatamanish, waheadt noh nahtukauonadt 15. kah wutch kummukkiesuinneat koowabteo wunneet upanatanswe wussukwhongash, &c. Cambridge, Printed 1669.

(*INDIAN PRIMER* については本稿と直接関係ないのでここでは取り上げなかった)。